

2019年度 千葉大学審査学位論文（要約）

題目：16・17世紀西地中海地域におけるモリスコの言語・信仰・帰属意識

氏名：押尾 高志

本研究では、アンダルス（イスラーム支配下のイベリア半島）に居住したムスリムの末裔にして、16世紀初頭のスペインでカトリック信仰への強制改宗を経験し、最終的に1609-1614年にイベリア半島全体から追放されたモリスコを研究対象とする。スペインやマグリブ（北アフリカ）を中心とした近世西地中海に広く存在したモリスコが、アンダルス時代から受け継いだイスラーム信仰をどのように維持し、発展させていったのかを言語・文字・信仰の関係から明らかにし、移住および追放という地理的移動が彼らの帰属意識に与えた影響についても合わせて考察することが本研究の目的である。

1492年にナスル朝グラナダが滅亡した後、キリスト教支配下に編入されたムスリム住民は、1526年までに全員が強制的にカトリック信仰へと改宗させられ、モリスコと呼ばれるようになった。これらのモリスコの中には、この強制改宗後もイスラームの宗教的・文化的慣習を保持し続ける「隠れムスリム」も多く存在し、実際に地中海南岸のイスラーム勢力との関係を維持していた集団も存在した。スペイン王権や教会にとって、これらの「隠れムスリム」は信仰に対する背教者であり、オスマン帝国をはじめとするイスラーム勢力に与する内なる敵であった。そのため16世紀を通じて聖俗両当局は、異端審問や福音化事業をはじめとする手段を用いて、モリスコをキリスト教社会へ同化・統合することを試みた。しかし、最終的にこれらの試みは失敗に終わったと王権によって判断され、1609-1614年にかけて、スペイン王国全土からのモリスコの全体追放令が発布・施行された。これにより、モリスコはマグリブやオスマン帝国支配領域の中東への移住を余儀なくされた。

このように、モリスコたちは1世紀以上の間、社会的包摂と排除、すなわち同化政策と国内における強制的移住政策、ムスリムやユダヤ教徒の子孫を社団や教会組織から排除する血の純潔規約 *limpieza de sangre* と呼ばれる差別規定による他者化を経て、17世紀の最終的追放後に、いわば「難民」として地中海地域へ離散した。モリスコの歴史的経験は、現代ヨーロッパに流入するムスリム移民と似ているとも言え、さらに地中海地域における住民移動という観点から見れば、その方向は北から南へと逆であるとしても、モリスコの離散が現代の難民問題にもつながる重要なテーマであることが認識される。

モリスコに関する研究は、スペイン国外追放という措置の是非や追放のスペインへの影響に関する議論から始まり、近年ではスペインにおけるアンダルス史研究の潮流と連動し展開する傾向にある。20世紀半ばまでのアンダルス史研究は、スペインにおけるイスラームの存在を、すなわちアンダルスをどのようにスペイン史的な文脈に位置づけるかが問われていた。しかし、1990年代以降のスペインのアラブ学者の間では、スペインの一部としてではないアンダルス自体の歴史研究の模索や、他のヨーロッパ諸国との関係に加えて、他のマグリブ地域や中東との関係も視野に入れた研究が進展

しつつある。

この変化を受けて、モリスコ研究においても、17世紀初頭の追放に先立つ政策議論や実際の追放プロセスの執行に注目した研究や、モリスコ集団内の文化的宗教的多様性に着目した研究が展開しつつある。言い換えれば、従来のようにモリスコを、均質的な「隠れムスリム」として分析対象とするのではなく、(1)イスラーム信仰を遵守し、カトリック信仰に抵抗し続けるグループ（「隠れムスリム」）と、(2)イスラームの文化的遺産を、信仰教義というよりもむしろ文化的アイデンティティとして固持するグループ、(3)キリスト教社会へ完全に同化し、キリスト教化したグループ、と大きく3つのサブ・グループに分類し、モリスコのアイデンティティを形成した多様な文化的宗教的要素に着目する研究が増加している。

本研究では、このような研究動向を踏まえ、「隠れムスリム」としての自己認識を強く持つモリスコに焦点を合わせて、彼らの言語・信仰・帰属意識に関して連続性と変化を明らかにすることを目的とする。(1)と(2)のモリスコを緩く結束する紐帯であるイスラーム信仰は、モリスコの文化的多様性の一つである言語的差異を越えて共有されるものであったため、アラビア語・アルハミーア・スペイン語史料の三種を複合的に用いることにより、宗教的・言語的境界線上に位置した、彼らの信仰生活や集団意識について考察することを試みる。

本研究で用いる主な一次史料は、モリスコあるいはアンダルシー（アンダルス出身者）自身が書き記した史料である。それらは言語・文字表記別にアラビア語史料、アルハミーア史料、スペイン語史料の3種類に分類される。アラビア語史料としては、年代記やスペインをはじめとするヨーロッパ・キリスト教世界への旅行記、オスマン帝国スルタン宛の書状などを中心的に用いた。アルハミーア史料とスペイン語史料は、双方とも用いられている言語がスペイン語であることに加え、史料内容にも共通するものが多い。両史料については、クルアーンをはじめとして、イスラーム信仰やその実践に係る神学書や法学書、ハディース集、ファトワーのほか、様々な伝説や予言などを収集した集成を数多く用いた。また、モリスコあるいはアンダルシー由来の史料以外にも、同時代のスペインのキリスト教徒の手によるアラビア語文法書や書簡集、覚書、年代記なども必要に応じて参照し、補完的に使用した。

各章の要約は以下の通りである。

第1章では、モリスコが言語的宗教的境界の間をいかに行き来していたのかについて検討した。モリスコの口語におけるスペイン語化の進展には、当該地域のキリスト教諸王国による征服時期、都市と農村の差、更には男女間差異の三点が大きく影響を与えていた。それゆえ、カスティーリャ・アラゴン地域のように、キリスト教支配下に編入された時期が早かった地域ではスペイン語化の進捗は著しく、一方でグラナダ

地域は 1492 年にカトリック両王に征服されたため、スペイン語化は 1570 年代まで進展せず、アラビア語話者モリスコが多数派を占めた。都市と農村との差異については、バレンシア地域が好例となる。同地域のキリスト教支配下への編入は 13 世紀と早かったにもかかわらず、同地域のムデハル住民（キリスト教支配下のムスリム住民）およびモリスコ住民の多くが農村部に集住しており、旧キリスト教徒社会との接点が少なかったため、17 世紀初頭の全体追放の時期までアラビア語を維持し続けた。さらに、男女間の差異という点では、モリスコ男性の方が女性よりもスペイン語化は進展していた。これは、モリスコ女性は家庭内で育児や家事に従事することが多く、スペイン語話者であるキリスト教徒と接触する機会がモリスコ男性と比べて非常に少なかったため、相対的にアラビア語を保持していたと考えられているからである。口語という点に限定すればキリスト教社会との関係性の長さや接触機会の多寡が、そのスペイン語化に大きく影響していることは明らかである。

また、書かれた言語としてのテキストについては、基本的には口語の言語的境界と同様の広がりを見せており、アラビア語テキストはアラビア語話者モリスコによって、スペイン語テキストはスペイン語話者モリスコによって用いられた。二つのテキストの間に存在したアルハミーア・テキストはスペイン語話者モリスコの中でも、イスラーム信仰への帰属意識を強く持ち、かつアラビア文字をイスラーム信仰の象徴として認識していた者たちによって作成された。マグリブでは、モリスコはアラビア語テキストでの記述を再開する一方で、イスラーム信仰についての作品をアルハミーア表記ではなくラテン文字表記スペイン語で著した。アルハミーア・テキストが、スペイン語話者でアラビア文字が理解できるモリスコのみを読者として想定していたのに対し、ラテン文字表記スペイン語の反キリスト教的作品は、アラビア文字すら理解できなくなったモリスコに加え、時にはヨーロッパのアラビア語を理解しないキリスト教徒の読者をも想定していたと推測される。

アルハミーアを著したモリスコは、「隠れムスリム」としてアラビア文字を用いることでイスラームへの執着を示したが、アラビア語やアラビア文字がイスラーム信仰の象徴として機能するという認識は、モリスコのみならずキリスト教徒の間でも広く共有されていたと考えられる。これは異端審問記録のなかで、アラビア語で会話したことにより起訴されるモリスコや、アラビア語書物の所持で摘発されるモリスコの姿が多く確認されることから推察される。また、ラテン文字表記スペイン語で書かれたテキストにしても、著者であるモリスコたちは、アラビア語を最良の言語と称揚する一方で、ラテン文字を「キリスト教徒の文字」と呼び、アラビア語とイスラーム信仰の不可分性を訴えている。

一方で、十分にキリスト教化したモリスコで、グラナダ・モリスコ共同体の代表として当局との折衝役を務めた Francisco Nuñez Muley やモリスコ出身のイエズス会修道

士の Ignacio de las Casas は、イスラーム信仰とアラビア語をはじめとするモリスコ文化の分離を訴えた。彼らは、当時の地中海世界や中東のアラビア語話者キリスト教徒の存在や、アラビア語とキリスト教との関係にまつわる歴史的事実をもとに、イスラーム信仰とアラビア語の間に関係がないことを論証し、アラビア語の脱イスラーム化を図った。これは、アラビア語や文字をイスラーム信仰の象徴であると認識される社会において、モリスコ文化の、ひいてはモリスコ集団の半島における生存を目的とした戦略的言説であったと考えられる。すなわち、イスラーム信仰を固持したモリスコはもちろんのこと、キリスト教化したモリスコも同様に、アラビア語やアラビア文字をモリスコ集団のアイデンティティの核の一つとして、モリスコとしての生存のために必要としていたと考えられる。

第 2 章では、ムデハル・モリスコによるアラビア語写本使用の実態と、ガザーリーの著作をはじめとするイスラーム知識の伝達・継承の一端を明らかにすることを試みた。分析対象としたのは、スペイン国立図書館で新たに発見されたガザーリー Abū Ḥāmid Muḥammad b. Muḥammad al-Ghazālī (1058-1111) の著作『宗教の根幹に関する 40 の事柄の事柄 *Kitāb al-Arbaʿīn fī Usūl al-Dīn* (以下、40 の事柄)』のアラビア語写本 Ms. 5340 である。同写本にはアラビア語本文に対するアルハミーア表記欄外注が付記されている。この写本と、同図書館に保管されている他のガザーリー著作の写本と比較分析することを通して、モリスコのアルハミーア写本使用の実態と、ガザーリー著作をはじめとするイスラーム知識の伝達の一端を明らかにすることを試みた。

本章で取り扱った Ms. 5340 については、奥書からアラゴン連合王国における強制改宗令の布告以前である 1518 年にアラゴンのウエスカで少なくとも本文が書き終えられたことが明らかとなる。アルハミーア表記欄外注については、本文とは異なり、その追加時期を正確に同定することはできないが、この欄外注と同じ種類のインクで書かれた親指付指印が付記された箇所に着目すると、それがイスラーム信仰の秘匿に関連する箇所につけられていることが判明する。アラゴン連合王国では、1526 年のキリスト教への強制改宗令以前には、カスティーリャ王国と異なりイスラーム信仰の実践が法的に保障されていたことから、信仰の秘匿や虚偽を述べることについて関心を持っていたのは、ムデハルではなくモリスコであると考えられる。そのため、アルハミーア表記欄外注は、アラゴンでの強制改宗令施行以後、すなわちモリスコ期に付け加えられたものであると推測できる。

また、注釈システムの分析を通じて、Ms. 5340 は既知のムデハル・モリスコ由来のガザーリー著作写本群と共通の筆耕者集団を持つ写本である可能性が高いことが判明した。同写本のアルハミーア表記欄外注は、既知の写本からは捉えることが難しかった、モリスコによるアラビア語・スペイン語間の翻訳過程の一部を解き明かすことに

もつながった。特に、欄外注の注釈者は、スペイン語対訳の欄外注を付記するばかりでなく、しばしばアラビア語の同義語も付け加えて、語義の確定を図っているため、注釈者自身が両言語に精通した人物であったと推測される。また、同写本の使用方法としては、モリスコ共同体指導者による「教本」的使用や写本作成時の語彙集ないし辞書としての使用が挙げられるほか、本文アラビア語に付記されている発音記号（母音記号）から「読む」だけではなく声に出して唱え、人々に読み聞かせる形で使用されていた可能性が指摘できる。いずれの場合にせよ、その所有形態はともかく、利用法は個人的な利益のみならず共同体的利益を念頭に置いていたと考えられる。

Ms. 5340 欄外には、アルハミーア表記注のほかにも、人差し指を伸ばした手を表彰する指印 *manicula* が複数記されている。そのうちのモリスコ期に付記されたと考えられる指印の一つは、緊急事態におけるイスラーム信仰の秘匿を是認するタキーヤ理論援用の根拠として先行研究で指摘されていた『40の事柄』の第2章第3節「言葉の強欲さ」の箇所付記されている。これは、モリスコがタキーヤ理論の法源として『40の事柄』を参照していたことを間接的に示すものであり、かつモリスコ期にもアンダルス期からのイスラーム知識が連綿と受け継がれていたことを暗示している。

このようなアルハミーア写本の存在は、アラビア語とスペイン語の二言語話者であったムデハルやモリスコが、アラビア語や文字の宗教的重要性を認識しつつも、スペイン語化の過程にあった自らの共同体のために、イスラーム知識をスペイン語で伝達することを許容していった過程を明確に示すものである。すなわち、カスティーリャ・アラゴン地域のスペイン語化したムデハルやモリスコの間では、イスラーム信仰のスペイン語化が試みられていたと考えることができる。ただし、このようなイスラーム信仰のスペイン語化は、スペイン全土で進行していたのではなく、あくまでカスティーリャ・アラゴン地域のように、スペイン語化したムスリムの居住した地域で確認される現象であり、グラナダ・バレンシア地域では、引き続きアラビア語でイスラーム信仰が固持され、特にバレンシアでは地中海対岸のマグリブとの交流も続けられていた点には注意が必要である。

第3章では、ハディース（預言者ムハンマドの言行録）に由来するグラバー *ghurabā'* という言葉が、モリスコを指す自称・他称として用いられてきたことに着目して、言語的境界を超えてモリスコに共有されたアイデンティティについて検討した。もともと、グラバーとは「異邦人、奇妙なもの、故郷から遠く離れ疎外されたもの」という意味を表す言葉であるが、終末論的ハディースと関連づけられた文脈では、終末の際にマフディー *mahdī*（救世主）に従って最後までイスラーム信仰を固持する、最良にして選良のムスリムという宗教的含意をもってしばしば用いられる。本章では、この終末論と関連づけられたグラバーという言葉が、アルハミーア史料ではもっぱら

algaribo と表記されていたことを指摘したほか、アラビア語からスペイン語への翻訳史料では、desamperado や guerfano (huerfano) という語に訳出されグラバーの意味を表していた可能性が高いことを示した。モリスコは居住地ごとに、言語的多様性を持つ集団であったにもかかわらず、アラビア語・アルハミーア・ラテン文字表記スペイン語史料の三種類の史料全てにおいて、このグラバーが自称・他称として使用されていたことが確認できるという事実は、モリスコの間で言語の境界を越えて、この呼称が共通のアイデンティティの一つとして認識されていたことを示している。

モリスコは、カトリック信仰への改宗の真偽を疑ったキリスト教社会からの迫害にさらされていた。このような迫害を逃れてマグリブを中心としたイスラーム支配領域へと移住することは大変困難であり、イスラーム王朝からの支援やムスリム海賊による救出活動も限定的であったことは、モリスコたちに終末の到来を予期させ、自集団を疎外された集団と認識させるに十分な状況であったと言える。

しかし、17世紀初頭にスペインから追放されたモリスコたちは、グラバーとしてのアイデンティティを追放先のマグリブでは強調することをやめる。追放先の現地ムスリム社会で自共同体の立場を安定させるためには、自身をグラバーであると主張し、他のムスリムからの疎外を強調するよりも、むしろアンダルス時代から続く預言者の血統（シャリーフ）や、自らが父祖より引き継いだイスラームの信仰実践を保ちつつ、現地社会での作法を学ぶことで、自集団がいかに由緒正しいムスリムであることを提示、あるいは確認することが重要となったのである。

第4章では、モリスコ由来の『礼拝手引書』の分析を中心に、マグリブ、特にチュニジアへの移住後にモリスコのイスラーム信仰がどのように連続し、また変化していったのかを捉えることを試みた。『礼拝手引書』という史料は、アルハミーア写本とラテン文字表記スペイン語写本の両方が現存しており、両写本の内容を比較分析することで、モリスコたちがアラビア語や文字を忘却しつつも、アンダルスから受け継いだイスラーム信仰の儀礼的規定をアルハミーア表記の『礼拝手引書』のなかに保存し、スペインからの追放後には新しいイスラーム知識を同書に付け加えていた様子を明らかにした。

『礼拝手引書』は単純化されているとはいえ、イスラーム法学書の形をとっているため、その内容は伝統的な法学に則ったものとなる。一方で、「オランのムフティーのファトワー」と呼ばれたマグラーウィー Abū l-'Abbās Aḥmad b. Abī Jum'ah Al-Maghrāwī Al-Wahranī (d. 1511) のファトワー（イスラーム法学者の法的見解）は、迫害下にあったモリスコの状況に合わせた実践についての「法解釈」を提供していたと言える。すなわち、キリスト教支配下のモリスコは、『礼拝手引書』に加えて、このファトワーを補完的に用いることで、伝統に立脚しながら自らの状況に応じた信仰実

践を継続しようと試みていたと考えられる。モリスコのイスラーム信仰は、キリスト教社会の監視下で、そのアンダルス時代の生命力を失いつつあったが、それでもなおモリスコはそれを維持しようと試行錯誤し、アルハミーアを用いて自らの口語となったスペイン語で、その遺産に新しい命を吹き込んだのである。

しかし、17世紀初頭の追放後、モリスコは移住先のチュニジアで異なる形の困難に直面した。すなわち、現地ムスリム社会への同化・統合という問題である。そのため、モリスコたちは、チュニジアを支配していたオスマン帝国の公式法学派であるハナフィー派の礼拝に関する規定を新たに学び、アンダルスのマーリク法学派とは異なる規定や、キリスト教支配下での生活の中で失われた要素を学び直す必要に迫られた。しかし、チュニジアに移住したモリスコの多くはスペイン語話者であり、アラビア語や文字を忘却していたため、スペイン語でイスラーム信仰を理解する必要があった。そのため、マグリブで書かれたと考えられるラテン文字表記スペイン語で書かれた『礼拝手引書』には、ハナフィー派の規定が追記され、イスラーム信仰に関する知識の刷新と統合が図られたのである。アルハミーアを用いて保持してきたイスラームの信仰実践を、アラビア語に翻訳し直すのではなく、ラテン文字表記のスペイン語で書き表したという事実は、モリスコにとってスペイン語がモリスコ自身の言語として、イスラームを表現するに足る言語として認識されていたことを暗示している。これはアラビア語で唱える必要のあるクヌート（祈禱）を、ラテン文字表記アラビア語に転写して、声に出して唱え易いようにしていたことから読み取れるだろう。

『礼拝手引書』のように、ラテン文字表記のスペイン語写本とアルハミーア写本が、同一の原本をもつケースの存在から、両者の間にはモリスコたちのイスラーム認識の連続性を見ることが出来る。すなわち、使用言語や文字が変化しても、彼らが必要とし、伝達した知識には一貫性が存在したと言える。

第5章では、マグリブにおけるアンダルシーおよびモリスコのアンダルスに対する表象について分析した。まず、アンダルスからマグリブへの移住の段階を、13世紀後半以降のアンダルス衰退期、15世紀末のナスル朝グラナダ滅亡期、16世紀後半の第二次アルプハーラス反乱（1568-1570）前後の時期、そして17世紀初頭の追放の四段階に分類し、各段階におけるアンダルシーおよびモリスコの性質について分析した。第一・第二段階の時期に、マグリブへ移住したアンダルシーは、カトリック信仰への強制改宗も経験しておらず、移住先のムスリム社会とは言語と信仰という点で共通性を保っていた。しかし、第三段階の第二次アルプハーラス反乱前後の時期、更には第四段階の全体追放令以後のモリスコは、少なくとも外見的には「スペイン化」していたため、マグリブの現地住民の目には彼らは対岸（アラビア語では‘udwa、敵という

意味でも用いる) からやって来た「よそ者」、更に言えば信仰の疑わしい人々として映った。

マグリブのムスリムからの疑いの眼差しは、モリスコたちに自らをアンダルシーとして、自己定義する必要性を認識させたと考えられる。イベリア半島において、居住地に由来する宗教的文化的多様性を持ち合わせていたモリスコたちは、移住後には同胞を「アンダルシーの兄弟」や、「アンダルシーたち」と集合的に呼称し、アンダルス出身者としての連帯意識を強めていく。このような変化は、モリスコおよびアンダルシーが、アンダルスへの帰属意識を創造し、自共同体の歴史的経験の再解釈をしていくきっかけになったと考えられる。

つづいて、モリスコやアンダルシーの手によるアラビア語史料で、彼らが自身の共同体の歴史的経験について記述する際には、想定される読者への著者の主張と、マグリブ現地社会への同化の進展状況に応じて、同じ事象について語る際にも差異が顕著に現れることを明らかにした。16世紀前半に成立した著者不明の年代記史料である『ナスル朝年代記 *Nubdhat al-'Aṣr fī Akhbār Mulūk Banī Naṣr*』では、キリスト教徒に宥和的であるムデハルを、キリスト教への改宗者（「背教者」）と等しく、信仰に対する裏切り者と描写するほか、スペインに残留した彼らの多くが不本意ながらもカトリック信仰に改宗したことを明確に述べている。

一方で、モリスコとしてスペインに暮らし、17世紀の全体追放を経験した世代であるアブド・ラフィーウ Ibn 'Abd al-Rafī' (d. 1643) の著作『最良の被造物の父祖の中にある預言者の光 *Al-Anwār al-Nabawīya fī Ābā' khayr al-Barīya* (以下、預言者の光)』では、アンダルス・ムスリムの間の改宗者や裏切り者といった存在は捨象され、著者自身を含めたアンダルシーの末裔のイスラーム信仰の正統性やアラビア語能力の確かさについて、自共同体以外のマグリブのムスリムへと訴える姿勢が見られる。

加えて、アンダルスからの移住の第三段階のきっかけにあたる第二次アルプハーラス反乱に関する記述に着目すると、モリスコたちが移住先であるマグリブ社会の眼差しをより意識していることが明らかとなる。例えば、『預言者の光』では、同反乱を8世紀のアンダルス征服以来、連綿と続くジハードの一つと位置づけ、ハディースを引用して、アンダルスには終末の日までムスリムが存在し続ける、という終末論的主張がなされている。また、17世紀後半のアラウィー朝（モロッコ）に仕えたアンダルス出自のガッサーニー *Muḥammad ibn 'Abd al-Wahhāb Wazīr al-Ghassānī al-Andalusī al-Fāsī* (d. 1707-8)によって書かれたスペイン滞在報告書『捕虜身請けのための大臣の旅 *Rihlat al-Wazīr fī Iftikāk al-Asīr*』では、この反乱失敗後にモリスコに対する強制改宗が行われたと記述されている。さらに、続く17世紀の全体追放に関する記述では、カトリック信仰に改宗した者はスペインに残留したと述べることで、マグリブへ移住し

てきたモリスコたちが、外面はどうあれ、内面的にはムスリムであることを暗示している。

マグリブ移住後のモリスコあるいはアンダルシーは、アンダルスがすでに滅び、カトリック・スペインになったことを明確に認識していた。「イスラームの家」としてのアンダルスが消滅した現実を受け止めた上で、自身の帰属するアンダルシーという集団が、改宗者あるいは棄教者などではなく、由緒正しいムスリム、あるいはその末裔であると主張し、自らの信仰的正しさを担保するために、ムデハルやモリスコに対しては、イスラーム信仰に対する裏切り者であるという論理を展開していくのである。

モリスコは、文化的宗教的に多様性のある集団であったため、本研究では「隠れムスリム」としての性格を強く示すモリスコを主な分析対象として、彼らの言語・信仰・帰属意識の連続性と変化について検証した。イスラームという宗教的紐帯によってゆるく結束されたモリスコ集団は、スペイン語とアラビア語の間の言語的境界線上で、イスラームのスペイン語化を図りつつも、アルハミーア・テキストを用いて、イスラーム知識を伝達することを選択した。また、キリスト教化したグラナダ・モリスコの中には、アラビア語とイスラームの間に想定された関係性を否定し、アラビア語の脱イスラーム化を図ることで自身の共同体の言語や文化を保存しようとした者もいたが、これは当時のスペインにおいて、イスラーム信仰とアラビア語の間にはア prioriに不可分な関係があると広く認識されていたためでもある。

言語的差異を越えて、モリスコの間で共有されていたグラバーという概念は、イスラーム支配領域のマグリブでは、アルハミーア表記法と同じくその役目を終え、姿を消した。追放後のモリスコたちは、アルハミーアに代えてラテン文字表記スペイン語でイスラーム関連著作を記述し続けたが、これは在マグリブのスペイン語話者であったモリスコたちが、「母語」でイスラームを語る自由を得た結果であろう。そして、移住／追放を契機に、モリスコたちは自身をアンダルシーとして積極的に規定し始める。そのなかで、カトリック・スペインにおける「隠れムスリム」あるいは新キリスト教徒としての過去は、アラビア語史料の記述では、アンダルス・ムスリムとしての過去へと書き換えられていったのである。